

haruton★

ta-kosuke

何？

---

緑色のフード付きのブラウスに、短いフレアーのスカート。  
素材も色も同一で、スカート丈は膝上。短いスカートからは  
まだ大人になりきれしていない少女の素足がスラリと伸びている。  
衣服の素材は光沢から見て、ビロードだろう。  
深くかぶったフードの下から、オレンジの猫毛が軽く揺れている。  
少女は両手で水をすくうような形を作っている。手の中にはオレンジの光の玉が浮いている  
丁度野球ボールくらいの大きさだ。

「まってね。」

少女はこちらを向いて、ニコッと笑った。

ハルトはドキマギしながら、頷いた。

まだ十代前半の彼は、彼女の揺れる髪すら直視できない。

それほどまでに、少女の美しさは、常識を逸脱していた。

少女は長いまつげを伏せ静かに呪文らしきものを唱え始めた。

彼女の細く白い手中におさまったオレンジの光は、その呪文に呼応するようにいっそう強く輝きだし、

そして光は少女を包み込み、そして隣に立つハルトをも飲み込んだ。

「いってらっしゃい。」

「なに？何て言ったの??」

僕は少女の声のトーンだけはなんとか聞き取れたが、一層輝きを増していった光に自らの発する声も飲み込まれ、そして眩く輝く光を前に、視力を失った。

周りは光だらけだ。何も見えない。

僕は少女の名前を呼んだ！

「タイニー！タイニー！どこなの？」

「いってらっしゃい。」

タイニーの声が遠くから聞こえた。僕は周りを見渡したが、すでに彼女の姿はみえない。

僕は光に目を鳴らすために静かに目を閉じた。

その瞬間僕の頭に何か重いものがガンッと落ちてきた。

「っつ！」小さなうめき声を上げた後、僕はその衝撃に耐えきれずに気を失った。

僕が次に目覚めたのは、藁のベッドの上だった。

まだ軽い痛みを頭に覚えながら、目をまだあけられずにいたが、  
たくさんの人の気配を感じ、僕は目を一度固くつぶってからゆっくりと瞼をあけた。  
ぼやけた視界に入ったのは、僕の周りを囲んで覗き込む人が幾人かの人々だった。  
僕はまだ先ほどの光の刺激で視力がほとんど回復していない。  
覗き込む人たちの形がぼんやりと見える。

僕は視力を戻そうと再び目を閉じた。

途端に右の頬に痛みが走った。

「痛っ！」

僕が叫ぶと周りの人達はクエッと奇声をあげて

僕の周りから散った。そして遠巻きに僕を見つめている。

どうやら僕は頬をつねられたらしい。

そしてそのつねった張本人はというと、目をまんまるにして、僕を凝視していた。

「えっと・・・。」

僕が声をかけるが、反応がない。

・・・・・・気を失っているようだ。

僕は身を起こそうと声を出した。

「よいしょ。」

クエッ

ハルトが声を出すと、回りの人々がびっくりして再び奇声を発した。

二回目の奇声だったのでハルトはそれほど気にもかけずに

身を起こした。

そして、辺りを見回した。

そこは部屋だった。

学校で習った遠い外国の話の時に見た、どこかの移動民族の家のような

粘土で作られた四方の壁と、その一角に木製のタンスが置かれてある。

かなりの年代のものであろうそのタンス上には緑の透き通ったガラス細工で花の形を象ったランプが置いてあった。

金色の細い持ち手がついている。

蝋燭立てのような形で、その蝋燭のおかれる部分にアルコールをしみこませた紐が置いてあり、

そこに火が燈されてぼんやりと光を放っていた。そのまわりの緑のガラスにより、

その光は薄い緑色となって、タンスをぼんやりと浮かび上がらせている。

タンスの引き手には、彫刻が施してある。

遠目で見ても分かるような美しく大きな柄の彫刻だった。

柄は草が絡まって、ところどころに花の花弁があしらわれている。

使い込まれてすり減っていなければ、より一層美しい彫刻だったろう。

ときおり隙間から入ってくる風にあおられて、ランプの光は儚げにゆらゆらゆれているのがより一層

幻想的な雰囲気をかもし出している。

だいぶ視力が戻ってきた。

部屋の広さは僕の家のリビングくらいだった。

うちのリビングは12畳あるのよ！とお母さんが言っていた。

なんで畳を敷いていないのに、12枚分だってわかるのかそれを聞いたとき疑問だった。

まあ。そんなことは良いとして。

「ええっと。あの・・・。」

クエエッ！！

先ほど気を失っていたヤツが気がついたらしい。

天井まで飛び上がって天井に頭をぶつけてやがる・・・馬鹿だなあ

「あっははは！」

僕は声を出して笑った。

すると僕を遠巻きに見ていたギャラリーは

一斉に僕のほうを向いて、目を剥きだしてクエーっと叫んだ。

よく見るとそいつらは、人間とはちょっと違った容姿をしていた。

一見人型なんだけれど、まず髪の毛がない。

その代わりに頭のとっぺんにトサカのようなものがはえている。

色は赤だった。

そのトサカは、小さいものではない。

それぞれにかなり手入れをしているのだろう。艶やかに美しく頭部を飾っていた。

見方によってはモヒカンや辮髪のようにも見える。

顔のつくりは人とあまり変わらないようだ。

すこしつり上がった細い眼には、それぞれに美しい緑の瞳を持っている。

鼻はスラリと高く、肌の色は僕たちよりかなり白い。

透きとおるような白い肌っていうのは、こういうのを指すんだらうなあ。

僕は、しばしそのギャラリーを観察したあと、声をかけた。

「あの・・・ここは何処ですか？」

彼らは互いに顔を見合わせながら、僕たちの言葉とは全く違う言葉で会話をした。

「えっと・・・あの・・・」

僕が二度目の問いかけをした時、先ほど天井に頭をぶつけて床につっぷしていたヤツが立ち上がり、ギャラリーの中に入っていった。

そして、後ろの方で僕たちの様子を窺っているような佇まいの青年の処へ歩み寄って耳打ちをした。

その青年はギャラリーよりやや浅黒く、瞳の色は深緑色だった。

トサカも他の者より赤黒い。

トサカの一部にはハサミで切り込みを入れたような傷があった。

その青年が片手をあげると、先ほどまで騒がしかったギャラリーが一瞬にして静まった。

青年は、僕の方へ歩みよってきた。

回りのにわとり人間たちは固唾を飲んでその様子を窺っている。

「あなたは どこから いらしたの ですか？」

少しイントネーションの違うが、僕の国の言葉だった。

「えっと・・・実は、友達魔法で飛ばされてしまって。  
町の中心に大きな教会のある町に行きたかったんですが、  
ここから遠いですか？」

さきほど天井までぶっ飛んだヤツが彼の横にやってきた。  
またボリボリと囁いている。

「それは たぶん ここから 三日ほど あるいた ところにある  
まちだと おもいます。」

横にいたやつが、うんうんと頷いている。

他のギャラリーは、僕たちの会話がわからないらしく  
退屈そうにして、あくびまでしている者がいる。

ずいぶん遠くまで飛ばされちゃったな。



## はじまり？

---

朝は目玉焼きと食パンを食べた。

学校に行った。

友達と話をした。

給食を食べた。

五時間目が終わった。

友達と帰路についた。

中学に入って僕は、毎日同じことを繰り返している。

「退屈だよな〜。」

隣にすむ幼馴染の佐伯友広が言った。

「だよなあ。中学校って本当に退屈だし

勉強は面倒くさいし。」

学校の規則は妙に厳しいし、靴下の色が白じゃないといけないなんて

守って何になるんだろう。

その頃僕は毎日が退屈で退屈でしようがなかった。

日差しはだいぶ夏に近くなってきていて、  
はるとたちは衣替え間近の冬の学ランの下に  
軽く汗をかきながら、帰路についている。  
海に入れる季節まで、あと少しの辛抱だな。  
はるとは、友人と夏の予定を話しながら歩いた。

「夏休みはどうする？やっぱり、いつものごとく親戚の家に入り浸り？」  
友広ははるとに尋ねた。

「そうだなあ。でもその前に、お前とプールにいかなくっちゃあなっ！」  
はるとは、細く小さな目をいっそう細くしながら、ニヤッと笑った。

はるとは毎年夏休みには、父親の実家に入り浸っていた。  
両親は、たまには家にいたらどうだ。と毎年はるとに言うのだが、  
はるとは、祖父の家の田舎臭さとそれを外から運んでくる  
自然の心地よい風が大好きで、家にいることなど考えもしなかった。

いろいろと話をしているうちに、二人は家の近くの三叉路にたどりついていた。  
はるとは、右側、友広は左側の道に行く、  
小学校からずっと、彼とはこの三叉路で毎日待ち合わせ、帰りはここで別れるのだった。

はるとはじゃあまた明日なっ、幼馴染に手を振り  
右の道を進んでいった。

歩いて一分もしないうちに、自分の家にたどり着く。  
はるとは、ふうと一息ついて、家の門を開け、家に入っていった。

空には、少しばかりの黒い雲がはるとの家の上にぽっかりと浮かんでいた。

「ただいま～」

僕はいつもと同じくダルそうに家にいる母に声をかけた。

無言で入っていく反抗期の友人も最近多いらしいが、僕は特に挨拶をするもしないものなんとも思わないので声をかけるわけだけれど、

母は、そういうところは、私の育て方が良かったのね。とうれしそうに近隣の井戸端会議では自慢している。

「おかえりー！」

二階から元気な男の子の声がして、だだだだっと階段をおりてくる足音がした。

弟のたけるだ。弟はいま9歳。僕は13歳だからよっつ違いの弟になる。

兄弟は一人。僕が中学校へあがってからは、遊ぶ時間帯が違ってきて、弟との距離が少し空いたような気がする。

「たける～今日は珍しく家にいるんだな。ちゃんと宿題したか？」

兄っぽい声の掛け方だと我ながら思う。

「したよ！今から遊びにいくところ。おにいちゃんは、ちゃんと勉強してきた？」

「もちろん。居眠りなんてしてないよ。」

僕はニヤッと笑ってたけるを見た。

たけるも、クツと笑って、「悪いお兄ちゃんだね～」などと言いながら、母のところへ外へ出かける報告をしに行った。

僕は二階のたけるの部屋の隣にある自分の部屋へ行った。

中学校にあがってから、弟とは部屋を別々にした。

僕が弟の年だった時には、弟とは部屋を同じくしていたのだけれど、兄が中学校へあがったからと

弟は自分の部屋を確保することができたのだ。多少うらやましいと思わないこともないが、僕のほうが先に生まれたのだからしょうがない。

その分思う存分兄貴風をふかさせてもらっているのだから。

「ああ～今日もだるかった・・・。」

僕は鞆を机の上に投げ出し、ベッドへつつぷした。

枕に顔を埋めて、しばし目を閉じた。

今日は宿題はない。テレビ番組は何があるだろう・・・。

最近僕が好んで見るのは音楽番組と、お笑い番組だ。

学校の休み時間の友達との会話もほとんどがそれだった。

「そうだな～・・・。何を見ようかな。」

僕は、目をつぶったまま今日の番組を頭に思い浮かべた。

「ねえねえ・・・。」

「ねえってば!!!」

僕は突然髪少量つかんでひっぱられた。

「痛いな。やめろよ！」

僕はそれを手で払いのけた。

「ねえーってばったら！」

また髪をひっぱってくる。

「痛いって！やめろよたける！」

僕はその手をまた払いのけながら、ベッドから起き上がりたけるのほうを向いた。

「・・・って、誰？」

僕の今の驚いた顔を見たら、たけるも笑い転げるだろうくらい、目をまんまるにひらいて僕はそいつを見た。

「こんにちはあ〜」

そいつはにこにこしながら、目をまんまるにひらいている僕に向かって言った。

「はあ・・・こんにちは。」

とりあえず、わけもわからずに挨拶を返してみた。

「寝てた？」

大きな目をくりくりさせながら、僕に尋ねてくるそいつ。

「うーん・・・。ていうか、誰？」

「ん？」

そいつは、ぴよんと天井にむかってかえるのようにとび跳ねてから、天井にへばりついた。

そして僕の目の前にストーンと降りてきて、大きな目玉をきょろきょろさせながら、僕のほうへ顔を近づけた。

まちがない。こいつは、かえるだ。大きな蛙。

蛙は僕から目をそらして、勉強机のほうへぴよんと飛んだ。

机の上に乗るとこちらをふりかえった。

水かきのついた両方の後ろ足が机からはみ出して、大きなおなかは机の上に乗っている。

そして前足の人差し指をぴんと伸ばして、僕を指さした。

「見つけた！」

その指先は、人間で言うところの第一関節が大きな飴玉のようにまんまるで、窓の外から入った光にそれがあたり、七色に輝く飴玉を指先にくっつけているようだった。

そいつは、僕のことを指さしたあと、フッとニヒルな感じで笑い、ぴょんっと飛んで窓の外へ飛んで行った。

屋根づたいに、ぴょんぴょんとはねていき、その姿が見えなくなるまで僕は呆然とその緑色の影を目で追っていた。

「なんだ？あれ？」

夢でも見たのかな。

あまりに現実離れした状況を僕は把握できずに、夢を見ていたんだということで自分を納得させた。

「おにいちゃん！」

呆然としている僕を尻目に突然部屋のドアが開いた。

「あ？あ・・・ああ・・・なに？」

僕はわれに返りノックをしないで入ってきた弟を怒ることもせずに返答した。

「もうすぐ晩御飯だよ。早く降りてきなさいって、お母さんが。」

ベッドに腰掛けている僕の横に同じように、ちょこんと座って、僕のほうを見ながらたけるが言った。

「ああ、わかった。すぐ行くから、先に行ってな。」

たけるにそう声をかけて、僕はたけるが部屋から出るのを目で追いながら、

さっき蛙が飛び出していった窓を閉めた。

「・・・いつ窓あけたっけ？」

まあいいや、たぶん部屋に入ったときから、窓が開いていたんだよな。きっと

帰宅してから晩御飯まではずいぶん時間があったはずなのに。本当に眠ってしまっていたんだろう。

そう思いながら、僕は部屋を出て階段を降りた。

「おっそい！」

キッチンに置かれた四人がけのテーブルに、たけるとお母さんが隣同士で座っている。

僕は、たけると向かい合わせた席についた。

「お父さんは？って、まだ帰ってないよね。」

僕の父親は2交代制の仕事をしているそうだ。

今日は昼からそのまま夜勤を務めて朝、僕たちが登校する頃帰ってくる。

僕が生まれた時からずうっとそうだったけれど、二日に一回はこうやって母親しかいない無用心な夜を過ごしている

とは、言っても恐ろしい目にはあったことはないので、特に用心するわけでもなく別段普段どおりである。

今日の晩ご飯は鳥肉の唐揚げだった。

昔からお母さんは唐揚げを作るのが得意で、前日から「鳥肉に味を染み込ませるのよっ」と、言いながらんにくと生姜の独特のタレの香りを家中に漂わせていた。

「今日は学校はどんな感じだったの？」

ご飯をお茶碗によそいながら、お母さんが僕に訪ねた。

「ん？特に何もないよ。いつもどおり。」

そう、学校に行って、授業と給食を終えて、家に帰ってきただけ。

・・・変わったことと言えば、夕方変な時間に寝てしまって、おかしな夢を見たってことぐらいかな。

ハルトは一番大きな唐揚げを素早く取って自分の取り皿に置きながら考えた。

「あっ！それ！一番大きいやつ！僕が狙ってたのに！」

たけるが大声を上げて僕に文句を言ってきた。

「へへーん。早いもの勝ち～。」

僕はそう言うと大口を開けて唐揚げにかぶりついた。

「うん。美味しい。もぐもぐ。」

たけるの恨めしそうな顔を見ながらニヤニヤしていた僕だが、彼の後ろの、キッチンの入口にふと目をやってぎょっとした。

たけるの背からおおよそ1メートルほど離れたキッチンの入口から大きな目玉がギョロッとこっちを覗いていたのだ。

「え。」

僕は箸で挟んでいた唐揚げを取り皿にポトンと落としてしまった。

「何？お兄ちゃんどうしたの？」

たけるが、僕の視線の先を追って後ろを振り返った。

「見るな！」

僕は大きな声でたけるに叫んだが遅かった。

しっかりとドアの入口を確認したようだった。

「何？大声だして、オバケでも見たのかと思ったのに。」

僕が見えている目玉は彼には見えないようだ。

なにもないじゃん。とつぶやきながらたけるはテーブルへ向き直ってお母さんに学校の話の続きをしだした。

僕には、たけるが入口を確認した時もずっと見えていた。開け放したドアからこちらをのぞく大きな目。

あれは・・・さっきのカエルだ。嘘だろ夢じゃなかったのか・・・。

カエルは僕のほうを見てニヤと笑ってカンペを出した。

カンペ知ってます？テレビのカメラの向こうで指示を書いた紙を持った人がいて。

その人が持ってる紙なんですけど・・・。

たまにお笑い番組とかで出てますよね？カンニングペーパーって言うだよね？たしか。

って、そんなことは置いといて、

ぎょろ目を覗かせているやつは、（部屋でまってる）と書いてあるカンペを僕に見せてニヤニヤしながら虹色の指先でVサインを作った。

もうこれは夢ではない。現実だ、しかもたけるには見えないカエル。

部屋で待ってるって？僕は全く意味がわからなかった。



カエルは、僕にVサインを出したあと、ひょいっと後ろをむいて、2階へ上がる階段をぴょんぴょんとカエル飛びで上って行った。

あれだけでっぴりと太ったカエルが階段を上っていったのに何の音もしなかった。

「おにいちゃん？」

たけるが、ぼうっとしていた僕に声をかけた。

「ん？あ・・・ああ・・・もぐもぐ。」

僕は何事もなかったかのように、皿に落とした唐揚げを箸でつまんで食事の続きをはじめた。

「ごちそうさまー！」

先にたけるが食事を終えた。

「おにいちゃん！後から部屋に行ってゲームしていい？」

僕の部屋には誕生日に買ってもらったばかりのゲーム機が置いてある。

夕食のあとは、二人で対戦型格闘ゲームをするのがここ最近の日常だった。

でも、今日はやばい。

きっとあのカエルが部屋で待っているはずだ。

「いや、今日は・・・俺・・・べ・・・勉強するから。」

「ええええっ！」

たけるだけならともかく、まだ食事の途中のお母さんも一緒になって声をあげた。

・・・ひどいじゃないか。

「どうしたの？ハルト？熱でもあるんじゃない？」

本気で心配している。

息子が勉強をする気になるのがそんなに不思議なことか・・・？

って、そうだろうな。

中学にあがってからも、勉強らしい勉強なんて家ではしたことなかったなあ。そういえば。

もっと、違う言い訳をすればよかった。

言ってから後悔してもしょうがない。

「熱なんてないよー。ちょっとやる気になっただけ。」

僕はニヤッと笑ってお母さんを見た。

「そうなの？それは良いことだわ。お母さん期待しちゃうね！」

お母さんは心配そうな顔から一転してニッコリと笑って僕の頭をなでた。

「やめてよ。恥ずかしい。」

すこしうつむきながらも、僕はニヤニヤした。

隣でたけるもニコッと笑った。「お兄ちゃん頑張ってるね！べんきょう！」

「よし！」と二人から励まされた僕は、2階の自分の部屋へ一人で上がって行った。

カエルと話が済んだら、本当に勉強するぞ！

僕は2階へ上がるとおそるおそる自分のドアを開けて中をのぞきこんだ。

「やぁ！待ってたよ！」

そこを定位置と決めてしまったのか、僕の机の上にカエルはデンと座ったまま片手を挙げた。僕は勉強机用の椅子に座ろうとしたが、あまりにもカエルとの距離が近くなりそうな気がして、自分のベッドのヘリへ腰掛けた。

「なに？ってか誰？ってかどこからきたの！」

僕は矢継ぎ早に質問を投げかけた。

早く追い出して勉強しなくっちゃ。

いつたけるやお母さんが入ってくるかわかんないし。

「そんなに、せつつかないでくださいよお。まだ、時間はた一つぶりあるんですからっ。」

カエルはニコニコしながら僕を見た。

「で、えっと何でしたっけ？誰？わたしが誰か知りたいんですかぁ？」

すこし小馬鹿にしたようなものの言い草に、僕はカチンとなりながらも答えた。

「うん。誰？」

カエルは人差し指を一本立ててからこう言った。

「か・え・る・で・す！」

口の片方をニヒルな感じで持ちあげながら、カエルはそう言った。

・・・んなことは、見ればわかるんだけどな。

「いや、そうじゃなくて。カエルは見たらわかるけど、僕の知ってるカエルはこんなにでっかくないし、

絶対にしゃべったりしないし。そんな変な指先じゃないもの。」

「変な！変なっ・・・変なっていましたか？！今！」

カエルはかなりのショックを受けたようだった。

haruton★

<http://p.booklog.jp/book/4408>

著者 : ta-kosuke

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ta-kosuke/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/4408>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/4408>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.